

## あしがき

古丁は、なぜ、愛国作家とも反動作家とも評されているのか。本書はこの素朴な疑問から出発した研究である。これに答えるには、古丁が何をし、また、その理由は何だったのかを明らかにしなければならない。そのため、資料調査、フィールドワーク、関係者インタビューなどの方法を用い、生い立ち、翻訳、創作、出版など様々な角度からアプローチした。調査を重ねるうちに、古丁をどう評価するかということ以上に、彼を代表とする中国人知識人が「満洲国」でいかに生きていたか、日本の植民地統治に対してどんなリアクションを起こしたか、のほうがいよいよ大きな問題ではないかと思うようになった。理論では簡単に割り切れない複雑な歴史の真相にぐんぐん惹きつけられてゆく思いだった。

古丁の仕事については、ほぼ全容を明らかにし、その言動と「満洲国」文化政策との関係、そして、満洲在住の中国人や日本人作家との関係もある程度整理できたと思う。もちろん、当時の資料がすべて公開されているわけではない。これからも新しい資料によって、本書の内容に修正を加えなければならない機会も生じるにちがいない。

総合研究大学院大学（総研大） 国際日本研究専攻博士後期課程在学中の四年間には、年二回ほど、中国東北地方の遼寧省図書館・長春市図書館・黒竜江省図書館・中国国家図書館・北京大学図書館・現代文学館などを訪れ、徹底した資料調査を行った。また、満洲問題の専門家である呂元明氏や、古丁の実妹徐青氏、長男で遼寧古籍出版社の元社長徐徹氏、および蕭軍研究家の張毓茂氏にインタビューを行った。これらの調査には総研大イニシアティブ事業ならびにサントリー財団から資金援助をいただき、また、総研大の小平桂一前学長からは温かい励ましをいただいた。以上の方々と団体に、深く感謝の意を表したい。

国際日本研究専攻のある国際日本文化研究センター（日文研、京都・桂坂）で過ごした日々は永遠に忘れられない。夜

十時頃に院生室を出て、ハウスの窓からの光を借りて見た、丘に立つ二頭の鹿の様子が、昨日のこのように頭の中に蘇る。その一瞬、「崇高」という言葉がどこからか飛び出してきた。なぜ鹿が仏や神につながるのか、わかったような気がした。

もちろん、何よりも忘れられないのは研究の日々である。日文研では、毎週のように研究会に出ることができ、猪木武徳所長をはじめ、先生方に変なお世話になった。研究班のメンバーで満洲研究家の西原和海、岡田英樹両先生からは貴重な資料の貸与を受け、多くのアドバイスをいただいた。上記の先生方にも深く敬意と感謝の意を表したい。

指導に当たってくださった鈴木貞美先生には、「非常感謝」を言いたい。当初は満洲研究にそれほど興味を持ってなかった私に、時に厳しく、玉ねぎを剥く様に一步一步問題解決に近づいていく研究の方法と楽しさを教えてくださった。鈴木先生がいなければこの本はなかった。学生の率直な意見を聞き、その問題意識を大事にする先生の指導方法は、これから私が教学の中で一步でも近づきたい目標である。

最後に、本書の出版にあたって、ネイティブでない者の日本語の添削に大変な手間と時間をかけてくださった日文研・出版編集室の白石恵理氏に敬意を表したい。

梅定娥 於南京紫金山麓

二〇一二年一月

## 著者紹介

梅定娥 (MEI Ding'e めい・ていが)

中国安徽省生まれ。

広州外国語学院 (現在、広東外語外貿大学) を卒業後、しばらく観光会社に勤務。2000年来日し、2010年3月、総合研究大学院大学で博士号 (学術) を取得。現在、中国南京郵電大学外国語学院に勤務。

主な論文に、「古丁における翻訳—その思想的変遷をさぐる」(『日本研究』第38集、2008年) などがある。

表紙：古丁写真、陳因編『満洲作家論集』實業印書館、1943年より。  
国際日本文化研究センター蔵

### 日文研叢書 49

#### こてい 古丁研究——「満洲国」に生きた文化人

発行日 2012年3月30日

著者 梅定娥

発行 大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国際日本文化研究センター

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3-2

<http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 為国印刷株式会社